



TITLE:

チノ語悠楽方言の使役

AUTHOR(S):

林, 範彦

CITATION:

林, 範彦. チノ語悠楽方言の使役. シナ=チベット系諸言語の文法現象2: 使役の諸相 2019: 163-179

ISSUE DATE:

2019-03-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/245172>

RIGHT:

チノ語悠楽方言の使役

林 範彦

1. はじめに



図1 チノ族居住区〔悠楽方言〕(加藤 2000 を筆者修正)

チノ語（基諾語；Jino, Jinuo）は中国雲南省景洪市基諾郷および補遠山地区に居住するチノ族（基諾族）の話す言語である。系統的にはチベット・ビルマ語派ロロ・ビルマ語支に属する。方言としては大きく悠楽方言 [ISO 639-3; jiu] と補遠方言 [ISO 639-3; jiy] に分かれる。チノ族の人口は 23,413 人（2010 年の人口統計）であるが、流暢な話者人口の詳細は不明である¹。本稿では悠楽方言のデータを用いる²。以下、本稿では「チノ語」と略する。

¹ Bradley (2007) および Endangered Language Project では悠楽方言の話者は 10,450 人未満、補遠方言の話者は 1,000 人未満であると推定している。悠楽方言について Endangered Language Project は 2018 年 3 月の時点で Severely endangered（深刻な危機に瀕した状態）の評価を与えている。

² 本稿では主として 2003 年から 2017 年までに現地調査により得られた悠楽方言巴卡方言のデータを用いる。例示するデータは自然発話と作例データをあわせて使用する。ただし、本稿においては記述の網羅性のため、作例データが中心となることを断っておきたい。調査協力者は主に W 氏（1980 年代生まれ；女性）、Y 氏（1950 年代生まれ；女性）である。本研究は日本学術振興会科学研究費補助金（ないし補助事業）(20720111, 23720209, 26370492, JP16H02722, JP17H02335) および三島海雲記念財団の援助を受けている。また現地調査については中国雲南民族博物館（高力青館長・謝沫華（前）館長・高翔氏）・西雙版納州民族宗教局（楊紹華氏）ほかの協力も得た。さらに本稿の内容は 2018 年 3 月 11 日に京都大学人文科学研究所にて行われた TB+ 会議で発表した。同研究会の代表である池田巧教授はじめ、参加者から貴重なご意見を多数いただいた。ここに記して謝意を表したい。

類型論的にはチノ語はSVあるいはAPVの語順をとる。また、名詞修飾表現については、形容詞は名詞に後置され、連体節（いわゆる関係節）はデフォルトでは名詞に前置される。チノ語は周辺諸言語に比して膠着性の高い言語である。

本稿ではチノ語の使役に関する諸現象について記述する。ただし、後述する使役接辞をめぐる問題（いわゆる分析的使役の問題）に限定して記述する。これはチノ語には語彙的使役や動詞の形態的な自他交替が基本的に見られないことによる。

本稿は以下の手順で論じる。第2節ではチノ語の動詞複合形式の概要を示す。第3節と第4節では使役に関するデータの分析を行う。第3節では使役を標示する各接辞と使役接辞の強制度の階層を取り上げる。第4節では二重使役（/三重使役）の問題を記述する。第5節でチノ語の使役の地域言語学的特徴について言及する。第6節で結論を述べる。

なお、チノ語の先行研究としては主として蓋（1986）、林（2009）、蔣（2010）などがある。本稿はチノ語の使役を記述言語学的な観点から整理・分析し、林（2009）を修正・補完する。蓋（1986）と蔣（2010）は本稿とは悠楽方言の異なる変種を扱っており、記述の枠組みも大きく異なる。本稿の分析との差異については注で最小限に言及する。

2. チノ語の動詞複合形式

2.1. 動詞複合形式

チノ語の動詞語根は一般にその前後に接頭辞類と接尾辞類を付加されて用いられる。この全体の構造を「動詞複合形式 (verbal complex)」と呼ぶ。模式化すると、(1) のようになる。

- (1) [接頭辞類 (PREFIX)- 動詞語根 -[接尾辞類 (SUFFIX)]

それぞれの接頭辞類と接尾辞類のグループは、その全てが共起することはないものの、以下の形と順序に展開できる。

- (2) a. [接頭辞類 (PREFIX)] = (prev) - (pref₁) - (pref₂) - (pref₃)
 b. [接尾辞類 (SUFFIX)]
 = (acc) - (B/R) - (T/A₁) - (T/A₂) - (caus) - (aux₁) - (aux₂) - (T/A₃) - (still) - (T/A₄)

各スロットに入る具体的な接辞類も例示しておこう。

- (3) [接頭辞類 (PREFIX)]
 prev (前動詞): tɕɛ⁴²-, ʃɔ- (「とても ~」), tʃɣ- (「さらに ~」), ku- (「また ~」)

pref₁ (接頭辞): a₁- (名詞化), ma- ~mɔ- (否定), thə- (禁止), a₂- (禁止)

pref₂: pi-, khø-, ja- (使役)

pref₃: m- (使役)

(4) [接尾辞類 (SUFx)]

acp (達成): -khjo (達成)

B/R (受益・相互): -m̥ə (受益), -ji (相互)

T/A₁ (テンス・アスペクト): -kɔ (進行)

T/A₂: -tɔ (経験)

caus (使役): -vi (使役)

aux₁ (助動詞): -khju (可能), -tɕhɛ (「あえて～する」)

aux₂: -ŋu (願望), -m̥ɣ (「～のようだ」)

T/A₃: -mɣ (過去), -me (未来)

still: -suw (「まだ～」)

T/A₄: -a (完了)

なお、重要な点として、同一スロットの接辞類が同一の動詞複合形式内に生起することはない。例えば、pref₂ の位置にある pi- と khø- は同一スロットにあるため、pi-khø- あるいは khø-pi- といった形で同一の動詞複合形式内に生起することはできない。

3. チノ語の使役接辞とその機能

3.1. 使役接辞の一覧と使役構文

チノ語の使役接辞は2節の(3)と(4)において、太字で表示したものである。ここで再度整理すると(5)の通りである。

(5) pi-, khø-, ja-, m-, -vi

さて、使役接辞の生起しない述語が用いられた態のことを「普通態 (simplex)」と呼ぶこととする。チノ語においては他の多くのチベット・ビルマ諸語と同様に、普通態の構文は以下の(6)のように整理できる。なお、ここでは形容詞述語は「述語 (自動詞語根)」に含むこととする。

- (6) a. [主語][述語 (自動詞語根)]
 b. [主語][目的語][述語 (他動詞語根)]

チノ語において、いくつかのインド・ヨーロッパ諸語のように形態統語的に主語あるいは目的語を規定することはきわめて難しい。ここでは、Dixon (1994) で示されているように、自動詞の要求項を「主語」と呼ぶこととする。チノ語は主格・対格型の言語である。他動詞述語の要求項は通常 2 項（以上）あるが、自動詞の「主語」と同一の格標示となる項が同じく「主語」となる。それ以外の項が「目的語」である。

その上で、使役構文のモデルを整理したい。(5) の使役接辞が動詞複合形式内で生起すると、使役の意味が生じる。この使役接辞の生起した述語を「使役述語」と呼ぶことにする。使役述語の生起する使役構文は以下のように整理される。なお、(7) では、動詞語根が自動詞である使役述語を「使役述語（自動詞語根）」、動詞語根が他動詞である使役述語を「使役述語（他動詞語根）」と記しておく。

- (7) a. [使役者] [被使役者] (=va⁵⁵) [使役述語（自動詞語根）]
 b. [使役者] [被使役者] (=va⁵⁵) [被動者 / 対象] [使役述語（他動詞語根）]

(7) では名詞句の標示が意味役割を用いた形となっている。(7) の普通態との対応関係としては、普通態の主語項が使役構文の「被使役者」に、普通態の目的語項が使役構文の「被動者 / 対象」となる。使役構文中の「使役者」の項は使役述語中の使役接辞によって認可される。「被使役者」が有生名詞であれば、後置詞 =va⁵⁵ が後接しうる。一方、「被使役者」が代名詞の場合は、斜格形をとる。

以下本節では、(5) で掲げた各使役接辞の機能を記述していく。

3.2. pi-

pi- は元来「与える」という意味を持つ動詞 pi⁵⁵ が文法化した接頭辞である。(8) で見るように、動詞複合形式内で生起すると使役述語を構成する。

- (8) a. zɔ⁵⁵ku⁵⁵ mɛ³³ɲu⁵⁵ + ʃɔ⁵⁵ tɕɔ⁵⁵-nœ⁴⁴.
 子供 牛 + 肉 食べる -SFP
 子供が牛肉を食べる。
- b. a⁵⁵mɔ⁴⁴ zɔ⁵⁵ku⁵⁵(=va⁵⁵) mɛ³³ɲu⁵⁵ + ʃɔ⁵⁵ pi⁵⁵-tɕɔ⁵⁵-nœ⁴⁴.
 母 子供 (=DAT) 牛 + 肉 CAUS- 食べる -SFP
 母は子供に牛肉を食べさせる。

(8a) は普通態、(8b) はそれに対する使役態の一例である。(8b) は(8a) に比べ、使役者項である a⁵⁵mɔ⁴⁴ 「母」が生起しているが、これは使役接辞 pi- が認可している。

さて、一般に使役における有効な分析手法として容認使役 (permissive

causation)と強制使役 (coercive causation) の2分法がある。pi- は本質的には容認・強制どちらにも指定されないと考えられるが、全体的には、(9)に見るように、容認使役の読みとなる傾向が強い。

- (9) nə⁴² ŋɔ³⁵ pi⁵⁵-le⁴⁴-la⁴²?
 2SG.NOM 1SG.OBL CAUS- 行く -Q
 行ってもいい? (= [直訳] あなたは私に行かせるのか?)

pi- を用いた使役では、被使役者は有生物であれば、人間でなくとも容認される。

- (10) a. ʃao³³li³³ ja³⁵ (= va⁵⁵) me³³tu⁴⁴ pi⁵⁵-tsɔ⁴⁴-mɣ³⁵.
 李さん 鶏.OBL (=DAT) とうもろこし CAUS- 食べる -PAST
 李さんは鶏にとうもろこしを食べさせた。
- b. a⁵⁵mɔ⁴⁴ khɣ⁴⁴ jɔ³³me⁵⁵ tso³³+tha⁵⁵la⁴² pi⁵⁵-ta³⁵+ja⁴⁴-me³⁵.
 母 それ 猫 家+上 CAUS- 登る+いく -PAST
 母はその猫を屋根に上らせた。

(10) はいずれも被使役者が有生物であるが人間ではない(「鶏」と「猫」)。しかし、pi- による使役文において容認される。このことは 3.3 と 3.4 に述べる使役接辞 khø- と ja- と大きく異なる点である。

3.3. khø-

khø- は強制使役専用の動詞接頭辞である。由来は不明である。pi- 同様、(11)で見ると、動詞複合形式内で生起すると使役述語を構成する。

- (11) a. ʃao³³li³³ tɕe³³phu⁵⁵ ma³³-tə⁵⁵+jɔ³³-mɣ³⁵.
 李さん 酒 NEG- 飲む+良い -NML
 李さんは酒が飲めない。
- b. ʃao³³wan³⁵ ʃao³³li³³ tɕe³³phu⁵⁵ khø³³-tə³⁵-mɣ³⁵.
 王さん 李さん 酒 CAUS- 飲む -NML
 王さんは李さんに無理やりに酒を飲ませた。

(11b) は (11a) に続く文であるが、ここでは1文ずつに分けて、分析する。(11a) は普通態、(11b) は (完全には対応しないが) それに対する使役態の一例であると考えられる。(11b) は (11a) に比べ、使役者項である ʃao³³wan³⁵「王さん」が生起しているが、これは使役接辞 khø- が認可している。

さて、(11) の日本語訳にも付したように、強制使役の読みが一般的に現れる。容認使役の文脈では *khø-* は生起できない。この例の場合、後述する使役接辞 *-vi* が用いられるのが普通である。

- (12) a. **ʃao*³³*waŋ*³⁵ *ʃue*³³*ʃi*³⁵-*ŋu*³³-*mɣ*³⁵.
王さん 勉強する -AUX-NML

*khɣ*³³ *a*⁵⁵*mɔ*⁴⁴ *ʃao*³³*waŋ*³⁵ *khø*³³-*ʃue*³³*ʃi*³⁵-*mɣ*³⁵.
3SG.OBL 母 王さん CAUS- 勉強する -NML

(王さんは勉強したい。(彼の) お母さんは王さんに無理やり勉強させた。)

- b. *ʃao*³³*waŋ*³⁵ *ʃue*³³*ʃi*³⁵-*ŋu*³³-*mɣ*³⁵.
王さん 勉強する -AUX-NML

*khɣ*³³ *a*⁵⁵*mɔ*⁴⁴ *ʃao*³³*waŋ*³⁵ *ʃue*³³*ʃi*³⁵-*vi*³⁵-*mɣ*³⁵.
3SG.OBL 母 王さん 勉強する -CAUS-NML

王さんは勉強したい。(彼の) お母さんは王さんに勉強させた。

khø- の持つもう 1 つの重要な特徴は、被使役者が人間でなければならないことである。(13) を見られたい。

- (13) a. *khur*³³*ŋi*⁵⁵ *zo*³⁵+*ja*⁴²-*nœ*⁴⁴.
犬 歩く+行く -SFP

犬が歩いて行った。

- b. **ʃao*³³*li*³³ *khur*³³*ŋi*⁵⁵ *khø*⁴²-*zo*³⁵+*ja*⁴²-*nœ*⁴⁴.
李さん 犬 CAUS- 歩く+行く -SFP

(李さんは犬を無理やり歩いて行かせた。)

- c. *ʃao*³³*li*³³ *khur*³³*ŋi*⁵⁵ *ka*⁵⁵+*zo*³⁵+*ja*⁴²-*nœ*⁴⁴.
李さん 犬 追う+歩く+行く -SFP

李さんは犬を追い出した。(lit. 李さんは犬を追って, (犬が) 歩いて行った。)

(13a) に対応する使役文として (13b) を構成しようとしても、許されない。コンサルタントとのインタビューでは、人間以外の動物たちのように言葉が通じないものに対しては、*khø-* は用いられないとの判断であった。おそらく、被使役者が人間以外の動物の場合、使役者が直接的な行為を下すことが多く、強制使役の接辞を用いることがないからだと考えられる。

3.4. ja-

ja- は khø- と同様に強制使役専用の動詞接頭辞である。由来は不明である。(14) で見るように、動詞複合形式内で生起すると使役述語を構成する。

- (14) a. ʃao³³li³³ tɕe³³phu⁵⁵ ma³³-tə⁵⁵ + jɔ³³-mɣ³⁵.
 李さん 酒 NEG- 飲む + 良い -NML
 李さんは酒が飲めない。
- b. ʃao³³waŋ³⁵ ʃao³³li³³ tɕe³³phu⁵⁵ ja³⁵-tə³⁵-mɣ³⁵.
 王さん 李さん 酒 CAUS- 飲む -NML
 王さんは李さんに無理やりに酒を飲ませた。

(14a) は (11a) と同一の例で、(14b) は (11b) の使役接頭辞を ja- に置き換えたものである。やはり、(14a) は普通態、(14b) は（完全には対応しないが）それに対する使役態の一例であると考えられる。そして (11b) と同様に、(14b) は (14a) に比べ、使役者項である ʃao³³waŋ³⁵「王さん」が生起しているが、これは使役接辞 ja- が認可している。

ja- は khø- と極めて高い互換性を持つ。(15) は (12) の使役接頭辞の部分をやはり ja- に置き換えたものであるが、ja- は生起できない。

- (15) *ʃao³³waŋ³⁵ ʃue³³ʃi³⁵-ŋu³³-mɣ³⁵.
 王さん 勉強する -AUX-NML
- khɣ³³ a⁵⁵mɔ⁴⁴ ʃao³³waŋ³⁵ ja³⁵-ʃue³³ʃi³⁵-mɣ³⁵.
 3SG.OBL 母 王さん CAUS- 勉強する -NML
- (王さんは勉強したい。(彼の)お母さんは王さんに無理やり勉強させた。)

更に ja- と khø- が共有するもう 1 つの重要な特徴は、被使役者が人間でなければならないことである。(16) を見られたい。

- (16) a. ŋɔ⁴² khu³³ni⁵⁵ khɣ³⁵ a⁵⁵khri⁵⁵ phi⁵⁵-vi³³-mɣ³⁵.
 1SG 犬 そこ 糞 排泄する -CAUS-PAST
 私は犬にそこで糞を排泄させた。(林 2009: 68)
- b. *ŋɔ⁴² khu³³ni⁵⁵ khɣ³⁵ a⁵⁵khri⁵⁵ ja³⁵-phi⁵⁵-mɣ³⁵.
 1SG 犬 そこ 糞 CAUS- 排泄する -PAST
 (私は犬にそこで糞を無理やり排泄させた。(林 2009: 68))

(16b) に見るように、被使役者が人間でない場合は ja- を用いることができない。

やはり、(16a)のように後述する -vi であれば容認される。

以上のように、ja- と khø- は多くの点で特徴を共有し、互換性が高い。ただし、ja- の方が khø- よりも強制度が高いニュアンスがあるようである。

- (17) a. lao³³si⁵⁵ ŋɔ³⁵=va⁵⁵ tso³⁵ {khø³³/*ja³⁵}-ʃue³³ʃi³⁵-mɣ³⁵.
先生 1SG.OBL=DAT 家.OBL CAUS-勉強する -PAST

先生は私に家で無理やり勉強させた。(林 2009: 152)

- b. a⁵⁵mɔ⁴⁴ ŋɔ³⁵ tɕiŋ³³xoŋ³⁵ {khø³³/*ja³⁵}-le³³-mɣ³⁵.
母 1SG.OBL 景洪 (PLN) CAUS-行く -PAST

母は私に景洪に無理やり行かせた。

コンサルタントへのインタビューから分析すると、ja- は使役者によって被使役者の行動の実現が確認されなければならないようである。(17) はいずれも使役者が口頭で被使役者に（高い強制的な圧力をかけて）行動を促すことが表現されているものの、被使役者の行為の実現を確認するところに至らないケースである。つまり、「先生」は「私」に確かに家での学習を命じ、「母」は確かに「私」に景洪に行くよう命じるのであるが、実際に学習したか、景洪に行ったかは「先生」も「母」も確認しない。ja- は被使役者の行動が目の前で起こる必要があるようである³。

3.5. m-

m- は元来「作る, する」という意味を持つ動詞 m⁴² が文法化した接頭辞である。(18) で見ると、動詞複合形式内で生起すると使役述語を構成する。

- (18) a. a³³tsi⁵⁵ thø³⁵+lɔ⁴²-nœ⁴⁴.
木 折れる+くる -SFP

木が折れた。

- b. khɣ⁴² a³³tsi⁵⁵ m³³-thø³⁵-mɣ⁵⁵.
3SG.NOM 木 CAUS-折れる -PAST

彼 / 彼女は木を折った。

(18a) は普通態、(18b) はそれに対する使役態の一例である。(18b) は (18a) に比べ、使役者項である khɣ⁴²「彼 / 彼女」が生起しているが、これは使役接辞 m- が認可している。ただし、他の使役接辞と異なる点がある。他の使役接辞は全て

³ ことによると、ja- と khø- の違いを証拠性 (evidentiality) の違いとして解釈し直すことができるかもしれない。ja- は一次情報に用いられる接辞で、khø- は証拠性の素性が指定されない接辞であるとも分析しうる。ただ、ja- と khø- の違いは非常に小さいため、今後も慎重な分析が必要である。

間接使役 (indirect causation) を標示するが, *m-* は直接使役 (direct causation) を標示する。このため, *m-* の生起する多くの例において, 「他動詞化」(transitivization) が生じたとみなすことも可能である。実際に (18a) の動詞 *thø*³⁵ を自動詞「折れる」, (18b) の *m*³³-*thø*³⁵ を他動詞「折る」と解釈することもできよう。

他方, (18) の使役接辞の位置に間接使役を表す接辞をおいても, (19) に示すように, 適格な文とはみなされない。

- (19) a. **khɣ*⁴² *a*³³*tsi*⁵⁵ {*pi*⁴⁴/*khø*⁴²/*ja*³⁵}-*thø*³⁵-*mɣ*⁵⁵.
 3SG.NOM 木 CAUS- 折れる -PAST
- b. **khɣ*⁴² *a*³³*tsi*⁵⁵ *thø*³⁵-*vi*³³-*mɣ*⁵⁵.
 3SG.NOM 木 折れる -CAUS-PAST
- (彼 / 彼女は木を折った。)

また興味深いことに, *m-* は形容詞の語根にも前接されうる。以下の例 (20) を見られたい。

- (20) *ja*⁵⁵*ŋ*⁴⁴ *lao*³³*tonj*⁵⁵-*mɛ*⁵⁵. *a*⁵⁵*prø*⁴⁴ *m*³³-*prø*⁵⁵-*khjo*³⁵-*xa*⁴⁴.
 今日 働く -PAST ドロドロだ CAUS- ドロドロだ -ACP-PFT
- 今日は働いた。すっかりドロドロになってしまった。(林 2009: 69)

(20) の第 2 文に注目されたい。*a*⁵⁵*prø*⁴⁴ は「ドロドロだ」という形容詞である。チノ語の形容詞は [*a-/la-/jo-* 語根] の構成を持ち, この語根は動詞語根と共通の形態論的特性を持つ。第 2 文後半の *m*³³-*prø*⁵⁵ は使役接辞が付加されていることから, 「ドロドロにする」という解釈となる。日本語話者にとっては大変難しい分析であるが, 省略された部分を補いながら, 可能な限り直訳すると, 「(私の服を) ドロドロな (状態に) すっかりドロドロにした」のような形となろう。このような形容詞語根への *m-* の付加はよく見られる。

また, 一般的に *m-* は静態的 / 状態的な意味特徴を持つ語根に付加されることが多いが, 直接使役を表現する場合であれば, 動態的な語根にも付加される。

- (21) *ʃao*³³*li*³³ *ŋa*³³*zɔ*⁵⁵ *m*³³-*pre*³⁵ + *ja*⁴²-*mɣ*³⁵.
 李さん 鳥 CAUS- 飛ぶ+いく -PAST
- 李さんは鳥を飛ばした。(林 2009: 151)

(21) は動態動詞 *pre*⁴² 「飛ぶ」に *m-* の付加した例である。これは鳥の「意志」に任せて自由に飛ばせるのではなく, 使役者である「李さん」が被使役者「鳥」

⁴ 例では声調交替後の 35 調となっている。

を捕まえて、李さんの手から鳥を「飛ばす」行為を表現している。

以上見てきたように、*m-* は直接使役専用の接辞であり、また直接使役は *m-* でのみ表される。さらに、(18) の例で分かるように、被使役者に有生性 (animacy) や人間性 (humanness) の制限はない。

3.6. -vi

-vi は使役接辞の中で唯一の動詞接尾辞である。由来は不明である。他の使役接辞同様、(22) で見るように、動詞複合形式内で生起すると使役述語を構成する。

- (22) a. ɕi⁴⁴ jo³³kha³³ tɕe³³phu⁵⁵ ma⁵⁵-tə⁵⁵-a⁴⁴-noe⁴⁴.
 これ 老人 酒 NEG-飲む -PART-SFP

この老人は酒を飲まない。

- b. ŋɔ⁴² ɕi⁴⁴ jo³³kha³³ tɕe³³phu⁵⁵ ma³³-tə⁵⁵-vi⁴⁴-mɣ³⁵.
 1SG.NOM これ 老人 酒 NEG-飲む -CAUS-PAST

私はこの老人に酒を飲ませなかった。

(22a) は普通態、(22b) はそれに対する使役態の一例である。(22b) は (22a) に比べ、使役者項である ŋɔ⁴²「私」が生起しているが、これは使役接辞 -vi が認可している。

-vi は間接使役専用で、かつ容認使役の読みをデフォルトで持つ。(22b) はデフォルトでは「この老人の酒を飲みたい意志」が解釈に現れる。

また -vi の被使役者は人間性の制限はない。

- (23) ʃao³³li³³ ŋa³³zɔ⁵⁵ pre³⁵+ja⁵⁵-vi⁴⁴-mɣ³⁵.
 李さん 鳥 飛ぶ+いく -CAUS-PAST

李さんは鳥を飛ばせた。(林 2009: 151)

(23) の被使役者は「鳥」である。加えて、この文のデフォルトの解釈は「鳥が自由に飛ぶ意志」が含まれる。この点は *m-* の生起する (21) と異なる。

3.7. 各使役接辞のまとめ——強制度の階層——

ここでまとめとして、第 3 節で見た使役接辞の強制度による階層関係と、被使役者の「人間性」の有無との関係性を整理した表を以下に掲げる。

表1 チノ語の使役接辞の種類と使役の強制度・被使役者の人間性

被使役者	間接使役 容認的 ←—————→ 強制的			直接使役
	[+human]	-vi < pi- < khø- < ja-		
	[-human]	-vi < pi-		m-

表1はチノ語の使役接辞の一覧を示している⁵。まず、チノ語の使役接辞は大きく、直接使役と間接使役に分かれ、m-のみが直接使役を表す。それを右端のコラムに置いている。その他の間接使役接辞については、被使役者の人間性が使役接辞の生起に関与し、khø-とja-は被使役者が人間でない場合は生起ができない。そのため、最下段のコラムには置いていない。

間接使役においては強制度の階層が存在すると考えられる。デフォルトで-viは容認使役を、khø-とja-は強制使役を表す。pi-は容認使役の読みが一般的にとられやすいが、pi-の強制性は元来指定されないものと推定される。ja-はkhø-よりも強制性が強いと解釈される。

4. 二重使役（/ 三重使役）の問題

チノ語には同一の動詞複合形式内に異なる使役接辞が共起する「二重使役（double causation）」あるいは「三重使役（triple causation）」の現象が存在する。二重使役あるいは多重使役は「直接使役 & 間接使役」か「間接使役 & 間接使役」の組み合わせが認められる。直接使役の接辞はm-のみであり、同一の使役接辞は同一の動詞複合形式内で1度しか生起できないので、「直接使役 & 直接使役」の組み合わせは認められない。

重要な点としては、4.1.2節で後述するように「間接使役 & 間接使役」の二重使役においては、意味として二重使役を表さないことである。以下、二重使役の例を中心に記述を行う。

⁵ ここで先行研究である蓋（1986）及び蔣（2010）の記述との差異を述べておこう。蓋（1986）は動詞と形容詞の接頭辞としてm⁴²の存在を示し、これが「使動態（使役態）」を標示する機能を持つと述べている（蓋 1986: 51–52, 60）。動詞に付加される場合、「動作行為の実行は外的な力の影響力の下でなされる」ことを表す、としている。形容詞に付加される場合の意味的な特徴については詳しい説明がないが、いわゆる「動詞化」のように見える。また本稿の-viに相当する形式として、蓋（1986: 111–112）ではve⁴⁴を挙げている。これは漢語では「让，被」に相当すると考えているようだが、「被动句（受動態）」を構成するのに用いられるとされる。

蔣（2010）も蓋（1986）同様に巴朵下位方言を取り扱っている。蔣（2010: 103–106）ではvi⁴⁴を使役の中心に据えている。vi⁴⁴は「外部の力が働いて、ある事柄が起きることを許される、あるいは禁止される時に使用される」とされる。また同様に動詞pi⁴⁴「与える」、m³¹「作る、する」、khjə³¹「派遣する、使う、呼ぶ、譲る」を動詞に対して前置させる例も挙げている。pi⁴⁴は「許可あるいは禁止に限って用いられる」と述べているが、m³¹とkhjə³¹については詳細な説明はなく、例のみが提示されている。これらは本稿の提示した使役接辞にいずれも形式上対応するが、直接使役・間接使役の分析や使役の強制度の違いについては一切触れていない。また本稿のja-に対応する形式は蔣（2010）では見られない。

4.1. 二重使役

4.1.1. 直接使役 & 間接使役

チノ語では直接使役と間接使役の接辞が同一の動詞複合形式内に共起する二重使役が起こりうる。直接使役の接辞は *m-* しかないため、具体的には *m-* と他の使役接辞の共起の問題が存在する。

- (24) a. $\eta\mathfrak{c}^{42}$ $kh\mathfrak{r}^{35}$ $a^{33}tsi^{55}$ $pi^{44}-m^{33}-th\emptyset^{35}-n\mathfrak{c}^{44}$.
 1SG.NOM 3SG.OBL 木 CAUS-CAUS- 折れる -PAST

- b. $\eta\mathfrak{c}^{42}$ $kh\mathfrak{r}^{35}$ $a^{33}tsi^{55}$ $m^{33}-th\emptyset^{35}-vi^{44}-n\mathfrak{c}^{44}$.
 1SG.NOM 3SG.OBL 木 CAUS- 折れる -CAUS-PAST

私は彼 / 彼女に木を折らせた。

- (25) a. $\eta\mathfrak{c}^{42}$ $kh\mathfrak{r}^{35}$ $a^{33}tsi^{55}$ $kh\emptyset^{35}-m^{33}-th\emptyset^{35}-n\mathfrak{c}^{44}$.
 1SG.NOM 3SG.OBL 木 CAUS-CAUS- 折れる -PAST

- b. $\eta\mathfrak{c}^{42}$ $kh\mathfrak{r}^{35}$ $a^{33}tsi^{55}$ $ja^{35}-m^{33}-th\emptyset^{35}-n\mathfrak{c}^{44}$.
 1SG.NOM 3SG.OBL 木 CAUS-CAUS- 折れる -PAST

私は無理やりに彼 / 彼女に木を折らせた。

(24), (25) は 3.5 節で見た (18b) よりもさらに一つ多く使役接辞が生起している。いずれも直接使役である *m-* と間接使役である他の使役接辞との二重使役である。*m-* は「木が折れる」状態にするための接辞で、3 人称代名詞 $kh\mathfrak{r}^{35}$ を認可するが、他の使役接辞はさらにその「木を折る」ことを生ぜしめる 1 人称代名詞 $\eta\mathfrak{c}^{42}$ を認可する。このように直接使役接辞と間接使役接辞の共起は意味的にも形態統語的にも二重使役であることが示される。

4.1.2. 間接使役 & 間接使役

次に、2 種類の間接使役の接辞が同一の動詞複合形式内に共起する例を見てみよう。

- (26) a. $\eta\mathfrak{c}^{35}$ $pja^{33}-vi^{44}$.
 1SG.OBL 話す -CAUS

- b. $\eta\mathfrak{c}^{35}$ $pi^{55}-pja^{33}-vi^{44}$.
 1SG.OBL CAUS- 話す -CAUS

私に話させてくれ！(林 2009: 154)

(26a) は間接使役接辞が1つだけ生起している例である。この(26a)ですでに「私に話させてくれ」と言う使役の意味を持った文となるが、この(26a)に間接使役接辞 *pi-* を生起させた(26b)も(26a)と同様の意味を持つのである。これは一種の形式と意味のミスマッチの問題であるが、実は間接使役接辞どうしの二重使役の場合、どの組み合わせであっても「単一の」使役であると解釈されるのである。以下も合わせて見られたい。

- (27) a. $\text{kh}\chi^{42}$ $\text{ʃao}^{33}\text{li}^{33}$ $\text{ku}^{55}\text{-pi}^{44}\text{-lao}^{33}\text{toŋ}^{55} + \text{le}^{44}\text{-}\text{ɔ}^{44}\text{-nœ}^{44}$.
 3SG.NOM 李さん また -CAUS- 働く + 行く -PFT-SFP
- b. $\text{kh}\chi^{42}$ $\text{ʃao}^{33}\text{li}^{33}$ $\text{ku}^{55}\text{-pi}^{44}\text{-lao}^{33}\text{toŋ}^{55} + \text{le}^{44}\text{-vi}^{44}\text{-}\text{ɔ}^{44}\text{-nœ}^{44}$.
 3SG.NOM 李さん また -CAUS- 働く + 行く -PFT-SFP
- 彼 / 彼女は李さんにまた働きに行かせた。(林 2009: 154)

- (28) a. $\text{a}^{55}\text{mo}^{44}$ ŋɔ^{35} $\text{a}^{55}\text{ko}^{44}$ $\text{pho}^{35}\text{-mjə}^{42}$,
 母 1SG.OBL ドア 開ける -SBN
 $\text{khjo}^{55}\text{lo}^{55}$ $\text{khø}^{33}\text{-tɛ}^{44}\text{-m}\chi^{35}$.
 中 CAUS- 見る -PAST
- b. $\text{a}^{55}\text{mo}^{44}$ ŋɔ^{35} $\text{a}^{55}\text{ko}^{44}$ $\text{pho}^{35}\text{-mjə}^{42}$,
 母 1SG.OBL ドア 開ける -SBN
 $\text{khjo}^{55}\text{lo}^{55}$ $\text{khø}^{33}\text{-tɛ}^{44}\text{-vi}^{33}\text{-m}\chi^{35}$.
 中 CAUS- 見る -CAUS-PAST
- 母は私に（無理やりに）ドアを開けて、中を覗かせた。
 (林 2009: 155)

- (29) a. ŋɔ^{42} $\text{zɔ}^{55}\text{ku}^{55}$ $\text{mɛ}^{55}\text{po}^{42}$ $\text{ja}^{35}\text{-tʃhu}^{33}\text{-m}\chi^{55}$.
 1SG.NOM 子供 乳房 CAUS- 吸う -PAST
- b. ŋɔ^{42} $\text{zɔ}^{55}\text{ku}^{55}$ $\text{mɛ}^{55}\text{po}^{42}$ $\text{ja}^{35}\text{-tʃhu}^{33}\text{-vi}^{33}\text{-m}\chi^{55}$.
 1SG.NOM 子供 乳房 CAUS- 吸う -PAST
- 私は子供に（無理やりに）乳を吸わせた。(林 2009: 155)

(27), (28), (29) はいずれも林(2009)からの引用である。いずれの例も(27a), (28a), (29a) に対し, (27b), (28b), (29b) は間接使役接辞が1つ増加している。しかし, いずれも意味的な変更は見られない。このことは(26) で見た二重使役と同じ現象である。間接使役接辞が同一の動詞複合形式内に複数共起しても, 使役のカウントは1つしかなされない。

意味的に重要な点としては, 複数の間接使役接辞の共起がある場合, 必ず一方

は -vi であることから、もう一方の使役接辞の強制度の方が高い点にある。このことから、全体の解釈として、必ず強制度の高い方の使役接辞の解釈の方が優先される。

4.2. 三重使役

実際の自然な発話で現れることはほとんどないが、形式的に使役接辞が同一の動詞複合形式内に 3 種共起することが可能である。以下の例を見られたい。

- (30) a. a⁵⁵mo⁴⁴ ŋɔ³⁵ a⁵⁵phi⁴⁴ pi⁵⁵-m³³-tshe³⁵-vi⁴⁴-mɣ³⁵.
 母 1SG.OBL 紐 CAUS-CAUS- 切れる -CAUS-PAST
 母は私に紐を切らせた。
- b. ŋɔ⁴² ʃao³³li³⁵ tʃen⁵⁵tɕŋ⁴⁴ ja³⁵-m³³-prɔ³³-vi³³-mɣ³⁵.
 1SG.NOM 李さん 電灯 CAUS-CAUS- 明るい -CAUS-PAST
 私は李さんに電灯を無理やりつけさせた。

(30) の例はいずれも使役接辞が「三重に」現れている。(30a) は pi-, m-, -vi が、(30b) では ja-, m-, -vi が共起している。しかし、これらの例は直接使役である m- とその他の間接使役接辞が共起している例であると解釈すべきである。4.1 節で見たように、異なる間接使役接辞が同一の動詞複合形式内で共起しても、意味的には二重使役を表さず、強制度の高い使役接辞の解釈が優先される「一重使役」とであると分析される。よって、(30) では間接使役接辞の解釈は 1 つしかカウントされないため、意味的には「直接使役 & 間接使役」の「二重使役」としてのみ解釈可能である。

(30) の例ではいずれも -vi が生起してもしなくても、論理的な意味は変わらないようである。これは上の説明と符合する。間接使役接辞は複数個共起しても使役の解釈は 1 個に限定され、かつ強制度の高い使役接辞の解釈が優先されるから、最も強制度の低い -vi は (30) の例では意味的にはほぼ何の貢献もしないこととなる。

5. 地域言語学的特徴

最後に、チノ語の使役接辞の地域言語学的位置付けについて、簡単ながら付言しておこう。

歴史的にはチベット・ビルマ諸語における使役のシステムは動詞の形態交替を伴う自他交替をベースとしていたと考えられている。チベット・ビルマ祖語の自他対応の存在する動詞のペアにおいて、他動詞は自動詞の形式に接頭辞 *s- を加

えた（あるいは自動詞接頭辞と交替させた）形式が再建される（Benedict 1972: 105–108, Matisoff 2003: 100–101）。チベット語やビルマ系言語など一部の現代語にその反映形式が観察される⁶が、大部分の言語における使役はより分析的な手法をとるようになったと考えられる。

現代のチノ語において、自動詞をベースとした他動詞の形式は見当たらない。その一方で、3節で見た5種類の使役接辞を発展させたことは重要である。使役の種類の多様性に対応する形で豊富な接辞を持つことになったのは興味深い。少なくとも現時点で知りうる限り、近隣のチベット・ビルマ諸語ロロ・ビルマ語支の言語では稀なケースであると考えられる。

ただ、特筆すべきは、5種類の使役接辞のうち、少なくとも2種類、すなわち *pi-* と *m-* がそれぞれ「与える, やる」⁷と「作る, する」からの文法化によって使役を表すようになったことである。周知の通り、「与える」と「作る, する」は世界の諸言語においても使役マーカーとして用いられることはしばしば見られる。

東・東南アジア諸語⁸に限定すれば、この両者ともに使役表現に用いる言語として標準タイ語が代表格である。ただ、チノ語と大きく異なるのは、標準タイ語が SVO 語順を取る高度に孤立的な言語で、この2つの形式 (*tham*「する」, *hây*「与える」)⁹を、動詞の接辞としてではなく、被使役者マーカーとして用いる点である。漢語普通話（標準中国語）¹⁰も“給 *gěi*”「与える」を使役表現に用いることがあるが、標準タイ語と同様に、被使役者マーカーとして用いる。漢語と標準タイ語と

⁶ 例えば、チベット文語において *riŋ-ba*「長い」vs. *sriŋ-ba*「長くする」のようなペアを見つけることができる (Matisoff 2003: 100)。

⁷ 日本語の「やる」は使役ではなく、受益 (benefactive) を表す。「遊ぶ」に対して「遊んでやる」は使役ではなく、受益態を表す。

⁸ 近年の研究のなかでは Jenny (2015) がミャンマー国内の諸言語における「与える」と「得る」の文法化の問題を整理している。

⁹ Iwasaki and Ingkaphirom (2005: 325) では、「迂言的使役 (peripherastic causative)」の構造として以下の (i) を掲げ、その名詞句や使役の性格について、(ii) の表にまとめている。

(i) NP_{1(CAUSEE)} {*tham/hây/tham-hây*} NP_{2(CAUSEE)} VP

(ii)

Causative Type	Typical Causer	Typical Causee	Degree of Control
/tham/	Animate Inanimate	Animate Inanimate	Strong control
/hây/	Animate	Animate	Weak control
/tham-hây/	Animate Inanimate Abstract	Animate Inanimate Abstract	Medium control

標準タイ語がチノ語と大きく異なるのは、(a) いずれの使役構文でも被使役者マーカーとして機能すること、(b) /*tham*/「する」と /*hây*/「与える」を組み合わせた /*tham-hây*/ が使役構文に用いられ得ること、(c) humanness「人間性」の指定がないことなどが挙げられる。一方で、/*tham*/ が強いコントロール (strong control) に、/*hây*/ が弱いコントロール (weak control) を表す構文に用いられることは興味深い。本稿のチノ語の分析においては /*m-*/ (動詞「作る」に由来) は直接使役に、/*pi-*/ (動詞「与える」に由来) は間接使役に用いられることと関連付けられるだろう。

¹⁰ 漢語普通話においては“弄 *nòng*”「いじる, つくる, やる」を状態述語の前に置き、“弄明白 *nòngmíngbai*”「はっきりさせる」のように使役動詞化のような機能を持つことがある。この現象は標準タイ語の /*tham*/ やチノ語の /*m-*/ に類似しており、興味深い。また漢語の“弄”は他の使役構文で用いられる“让 *ràng*”“叫 *jiào*”“使 *shǐ*”などと異なり、状態述語の直前に置かれることも重要なポイントである。もちろん、“弄”が用いられるのはいわゆる「処置文」(把字句)などに多く、構文上の問題とセットで考えねばならず、単純な比較は難しい点もある。

では文法的な位置付けは異なるものの、動詞「与える」の文法化から発展した形式が容認使役の文脈で用いられ得ることはチノ語にも当てはまる。「与える」本来の意味から考えれば、「(被使役者に) 行為の許可を与える」ことから容認使役の意味を生み出したと推定できようが、今後その歴史的発展が地域に限定されるものか、言語普遍的なものか、詳細な分析が待たれる。

6. おわりに

本稿はチノ語悠楽方言の使役について、動詞複合形式に生起する使役接辞を中心に、林(2009)で記述した内容を補完・修正する形で概括した。その特徴を以下に整理しておこう。

- (i) 使役接辞として pi-, khø-, ja-, m-, -vi の5種が認められる。
- (ii) m- は直接使役専用、その他の使役接辞は間接使役専用として用いられる。
- (iii) khø- と ja- は被使役者が人間でなければならない。
- (iv) 間接使役において -vi < -pi- < khø- < ja- の順に強制度が高くなると解釈される。
- (v) 形式的に二重使役が存在するが、意味的にも二重使役であると認められるのは、直接使役と間接使役の接辞が共起した時のみである。間接使役接辞どうしが共起しても意味的には二重使役として認められない。

林(2009)に比べて、いくつかの否定的証拠(negative evidence)による文法性判断の指摘、形式的な三重使役の存在¹¹や地域言語学的な特徴に言及したところは新しいと言える。ただ、言語類型論的な分析や歴史的発展の問題など、今後さらに取り扱うべき課題は多く、引き続き精緻な記述と深い分析を進めたい。

略号

A：他動詞主語，AUX：助動詞，CAUS：使役接辞，COP：コピュラ，DAT：与格，lit：直訳，N：名詞，NEG：否定辞，NML：名詞化，NOM：主格，OBL：斜格，P：他動詞目的語，PART：助詞，PAST：過去，PFT：完了，PL：複数，PLN：地名，Q：疑問，S：自動詞主語，SFP：文終止助詞，SG：単数，V：動詞

¹¹ チノ語では二重使役及び三重使役の問題があることを本稿で述べたが、他の言語に見られる二重使役と言っても同一の使役接辞の回帰的使用とは異なった様相を呈している。モンゴル語ハルハ方言では同じ使役接辞 -UUL- を一回生起させた場合は事態の実現が使役者に依存し、二回生起させた場合は事態の実現が被使役者に依存し、二回生起させても必ずしも「二重使役」を表さないようである(梅谷 1999, 2008)。また二回生起させた場合に実際の行為の実現者である被使役者に敬意を払っているニュアンスが生まれるようである。このような二重使役ないし多重使役の問題は言語類型論的にも重要な研究テーマとなろう。

参考文献

〈日本語文献〉

- 梅谷博之 1999. 「現代モンゴル語の使役を表す接辞が連続して現れる場合」(日本言語学会第118回口頭発表, 東京都立大学)
- 2008. 「モンゴル語の使役接辞-UULと受身接辞-GDの意味と構文」(東京大学博士論文)
- 加藤久美子 2000. 『盆地世界の国家論』京都: 京都大学学術出版会.
- 林範彦 2009. 『チノ語文法(悠楽方言)の記述研究』神戸: 神戸市外国語大学外国学研究所.

〈漢語文献 / 汉语文献〉

- 盖兴之 1986. 《基诺语简志》北京: 民族出版社.
- 蒋光友 2010. 《基诺语参考语法》北京: 中国社会科学出版社.

〈英語文献 / Written in English〉

- Benedict, Paul K. 1972. *Sino-Tibetan: A Conspectus*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bradley, David 2007. Language Endangerment in China and Mainland Southeast Asia. In Matthias Brenzinger (ed.), *Language Diversity Endangered*. pp. 278–302. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Dixon, R.M.W. 1994. *Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Iwasaki, Shoichi and Preeya Ingkaphirom 2005. *A Reference Grammar of Thai*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jenny, Mathias 2015. The far West of Southeast Asia: ‘Give’ and ‘get’ in the languages of Myanmar. In Nick Enfield and Bernard Comrie (eds.), *Languages of Mainland Southeast Asia: The State of the Art*. pp. 155–208. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Matisoff, James A. 2003. *Handbook of Proto-Tibeto-Burman*. Berkeley: University of California Press.

〈インターネット情報〉

- Endangered Languages Project on Youle Jino
<http://www.endangeredlanguages.com/lang/4328> [2018年4月30日アクセス]